

参るは降参

私の病院の検査技師さんが、ちょうど一年前にも腹下出血であつたというまに一夜で亡くなったのです。その人と外来担当の職員と一緒に仕事をしていたので、一周忌が来た時に、看護婦がこんなことを言ったのです。

「田畑先生、五所さん(検査技師)が一周忌になるから、お墓にお参りはいかがと思うのですが、私たち親戚でもないのに、お墓にお参りに行つていいでしょうか」というのです。そこで、私は「参るといふのをどのように考えていますか」ということを質問した。これに対してはつきりした返事はなかった。私が「まいるというのには「参る」とか書きます。参るといふのは、こういう意味合いがあるのです。降参するといふ。降参するといふのは、まいたたという意味です。負けたということです。何が負けたかと

いうと、私の分別が仏さんの智慧に負けたということ。ですから亡くなった人が仏さんになったという事は、煩惱を越えて仏さんの世界を生きる存在になって、そして私たちはまだ煩惱のみれで、迷っている存在だから仏さんの方が圧倒的に上の立場になっているから参るといふのです」と話した。「だから、仏さんにお参りして、どこかいい所に行つてもらおうと思うのではなくて、どうぞ仏さん私を見守ってくださいというのが、お墓に参る心かけとしてあるべき姿なのです」と話した。その看護婦はちょっと驚いた風でした。人々が思うのは、自分がお参りすることで死んだ人の霊が悪い影響を及ぼすのではないかなどと、若くして亡くなったので、どこかで迷っているのではないかなど私たちの分別でいろいろ考えるのです。だから「参る」ということ

は、わたしの理知・分別が、仏さんの智慧に参つたという世界に接することで、仏さんと私の関係ですから、「あなたはお墓に行つて、どうぞ仏さんの世界から見守ってください」というのがいいのです。その時に話したのですが、かつて中曽根さんという人が総理大臣の時に、臨調という国の制度をいろいろ整えようとする会があつて、その会長を土光さんという人がしていました。その土光さんの一日という放送がNHKであつた時に、土光さんが朝4時から5時に起きて仏壇にお参りして、食堂に行くのです。その食事が質素であつた。ごはんとめざしと味噌汁くらいであつた。その取材の時、NHKの記者が、仏壇から食堂に行く途中に、土光さんに「今、仏壇で何を願ひしたのですか」というインタビューをした。その時に土光さんが記者に「君、仏壇というのはお願

いするところではないではないか」と言った。すごいですね、「朝は、今日も頑張つてまいります」とあいさつするところですよ」と言った。「参る」というのは、お願いをすることだと世間一般は思っているのです。(中略) ある布教師さんが浄土真宗を学ぶ前は宗教というものは、何かお願い事をするところ、その前に呪文となるのが南無阿弥陀仏と思つていたと話をされてきました。その南無阿弥陀仏というのは、「小さな殻を出て、大きな世界を生きよ、理性・知性の殻を破つて、大きな世界を生きよ」という呼びかけなのです。だからそれを本當に受けとめたものが、「はい、仏様の教えの如く生きていきます」と言つて参るのが、南無阿弥陀仏という言葉なのです。こんな話を職員としたのです。佐藤第二病院院長 田畑 正久 先生

さんわ便り

第173号 所部 行報 さんわグループ 編集 大分市 森町

「長生き」

榎本 栄一

「念仏のうた」から 菩提樹第79号より

老妻に大小便の世話を かけながら 案外 長生きをする ようでございませぬ かしここれは まことに困ることで なむあみだぶつ

市井の念仏詩人榎本栄一翁が、91歳の時に、脳出血で倒れ、半身不随となつて病床の中でよんだ詩である。

新年を迎え、誰でもが一年の無事息災を願つたことであろう。だが、健康で長生きした先に何が あるのだろうか。「長生きも楽しじゃありませんよ、あなたは。最後は、

下(しも)の世話さえ人にみてもらうんだからね。それが、人間の現実というものですよ、あなた。だれだって、避けて通ることはいけません。ここへきたら、きれいごととは一つだつて通用しません」

「なむあみだぶつと称えることしかできないんですよ、私たちは。もとより、如来様はそれを先刻ご承知でいらしたからこそその選択本願のお念仏ですよ。本當に、ひとつも思うようにならない人生だけどもね、なるようにはなりませよ。その、なるようにはなつているところがさ、自分の一番の座りと定め、身をあずけるんですよ。とにかく、そのままでもいいんだからね。なむあみだぶつです。」

そんな榎本翁の声が聞こえてきそう。 (4・12) 「一番わかつていようで一番わからぬ この自分」 菩提樹第78号より 「あの時自分はなんであんなことをしたのか」すまじきことをもし、言うまじきことをも口にしたりき、私達はしばしば 「一番わかつていようで一番わからぬ自分」に出会う。 この「一番わからぬ自分」を明らかにするのが仏教である。「一番わかつていようで、一番わからぬのが自分のことでありました」と「自分で自分のことがわからない」ことがはつきり「わかる」ことが、念仏の智慧をいただくということである。 宿業のままに、「さるべき業縁もよおせばいかなる

親鸞聖人

いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし

ホ ム ペ ー ジ 改 葬 一 さん わ

日出店：速見郡日出町川崎会下(空港道路入口) TEL(0977)72-6415
三重店：豊後大野市三重町赤嶺1041(トライアル横) TEL(0974)22-3301
森町店：大分市横尾2733-1(大東中学入口) TEL(097)524-6525

永遠は現在の深みにありて未来にかがやき、常住は生死の彼岸にありて生死を照らす光となる。その永遠の光を感じるものはただ念仏である。 金子大栄著 『歎異抄領解

我々は「桜の花」を「桜」のすべてだと思いがちです。しかしそれはほんの一部分に過ぎません。 桜といふのは、花咲き、葉を繁らせ、大地に根を張り巡らせ、生きる。そのすべてが桜のいのちであるのに、一部が全体だと錯覚しているのです。

現在の日本の状況ほど特異なものはありません。それは「死んだらおしまい」という価値観が覆っていることです。戦後70年。「死んだらおしまい」という特異な感性の時代になりました。頼りはお金。享楽に明け暮れ、次の世への責任は取らない。悲しい哉、日本の現状です。



花びらは散つても 花は散らない。

桜の花は散つてしまいましたが、桜自体が無くなったわけではありません。桜という生命は脈々と続いています。そして桜の花は、我々にその美しい印象を鮮やかに残し、今も我が心にあります。思い出す度に鮮やかな輝きとなつて蘇ります。 花びらは散つても花は散らない。 形は滅びても人は死なぬ。